



「3・11」を伝える・富岡(上)  
 福島原発汚染視察⑤

今回の視察で一番長は二万六千人弱。視察時間滞在したのは富岡を企画したカトリック町である。二つの原子力発電所がある福島県双葉郡の中心地で、被曝(ひばく)前の人口



伝えたい  
 3.11を伝える町「とみおか」

「3.11」を伝える小冊子「伝えたい」

やすいと判断したから、町民に対して数日後、突然、避難命令が出されたという。十二日ばかり離れた福島第一原発で爆発事故が起こったことは知らずに、すぐ帰宅できるだろうと

「語り人(かたりび)の会」があり、「伝えたい」という四十人からなる被災の様子を伝える小冊子も作成している。

「富岡町3・11を語る会」が結成されたのは震災から二年経った二〇一三年のことだ。現在の語り人は十九人。我々のバスに乗って半日間、町内を案内してくれた女性も、その一人である。

被曝して今も住めない商店街の中の自分の家の前にバスを止め、体験を淡々と話されるのは、静かな口調であっても迫力がある。店のシャッターは降りたまままだが、被曝だけでなく、二度も空き巣に入られたと笑いながら話された。

さて、富岡町の震災直後のことだが、二〇一一年三月十一日、地震と津波の被害に遭

い、混乱も収まらない町民に対して数日後、突然、避難命令が出されたという。十二日ばかり離れた福島第一原発で爆発事故が起こったことは知らずに、すぐ帰宅できるだろうと着の身着のまま、貴重品だけ持って車で隣の川内村に避難誘導される。

避難誘導する警察官

(小冊子から)



来たことに罪の意識すら持つ。

何ごとにも表があれば裏もある。原発も賛否両論がある。被曝地の富岡ですら原発関連で働く人も多く、声高らかに原発反対と言いくらい面もあるという。身

た川内村も放射能汚染の影響があることがわかり、今度は内陸の郡山市に避難させられた。それから五年半経った今も避難生活を強いられているのである。当時の町民二万六千人のうち今年六月時点で二万三千七百二十人が避難生活を続けている。県外に避難していると相談に乗って下さる。語り人は海外にまで出掛けて実態を伝えていくという。電話・FAX番号は024・973・7151である。

さらには避難させられ